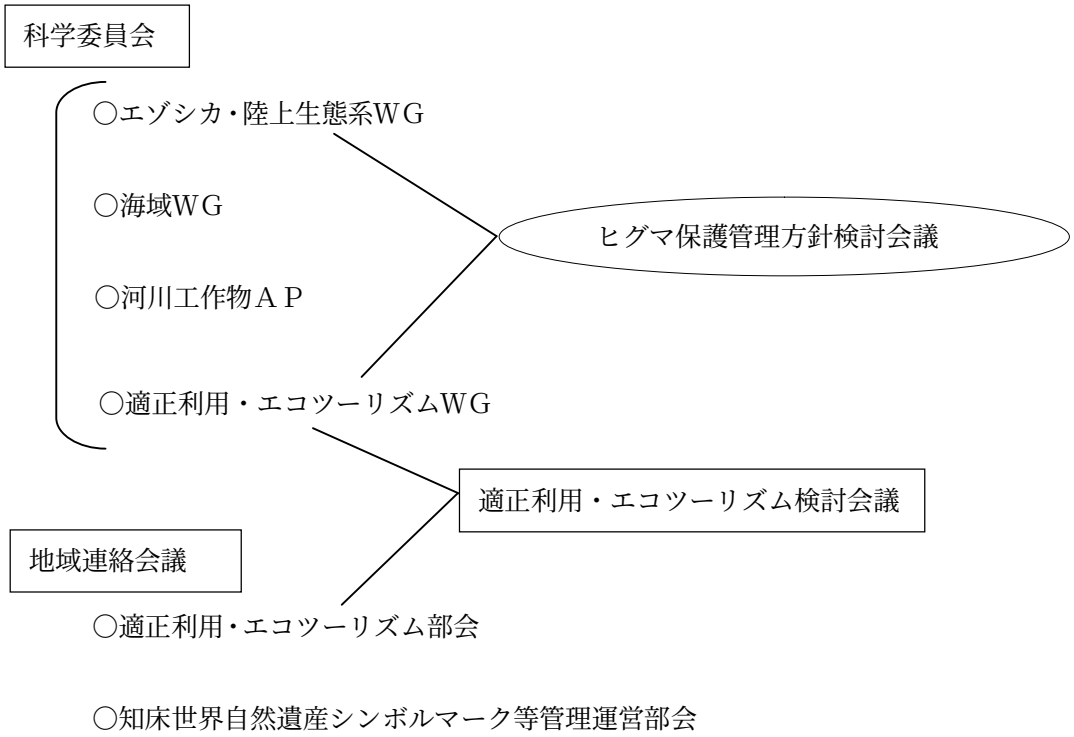
資料１－１

平成２２年度以降の知床世界自然遺産地域科学委員会の検討体制

１．平成２２年度以降の検討体制

平成２２年度より、科学委員会および各ワーキンググループ（以下、WG）等の再編を行い、新たに適正利用・エコツーリズムWGおよびヒグマ保護管理方針検討会議の新設を行った。以下に平成２２年度以降の検討体制を示す。



２．Ｈ２２年度より新設した会議

○適正利用・エコツーリズム検討会議

・国立公園の利用適正化検討会議から世界自然遺産としての検討会議へ移行。
・科学委員会WGと地域連絡会議部会との合同開催により実施。
・事務局は、釧路自然環境事務所、北海道森林管理局、北海道の３者。
・世界遺産委員会等の勧告において必要性が指摘されているエコツーリズム戦略の策定や国立公園の利用適正化検討会議から引き継いだ事項に関する検討を実施。
・既存で立ち上がっている知床五湖の利用のあり方協議会、カムイワッカ自動車適正利用協議会、ウトロ海域懇談会などについては、当面は検討会議の中で報告する形を取るが、徐々に検討会議の中の一個別会合となるように誘導していく。

○ヒグマ保護管理方針検討会議

・科学委員会の各WG等の関係の深い委員と行政機関により構成。
・科学委員会における戦略的な作業グループとして位置付ける。

・事務局は釧路自然環境事務所。
・ヒグマと利用者、地域住民との軋轢の解消およびヒグマ個体群の保全を目的とし、現状の整理・分析などを実施。
・今年度は専門家と行政機関にて基本的な対処方針（案）を検討し、来年度以降、適正利用・エコツーリズム検討会議等を活用しつつ、地元関係者との合意形成を予定。
・検討や具体的な対策のメインは遺産地域内とするが、密接に関連する標津町や斜里町の周辺地域も視野に入れて検討を実施。
・３～４年メドで管理方針の策定を目指す。

３．各会議のＨ２２年度以降の主要な課題

〇科学委員会

年次報告書の評価と助言、モニタリング計画の策定、気候変動適応戦略の検討
世界遺産委員会への報告、日露生態系保全協力プログラムへの協力
順応的管理のためのシナリオの検討

〇エゾシカ・陸上生態系ＷＧ

知床岬での密度操作実験、ルサ相泊での密度操作実験の試行
希少猛禽類の保全とエゾシカ対策の両立、植生への影響把握のための指標開発

〇海域ＷＧ

海域管理計画の進捗状況のフォローアップ

〇河川工作物ＡＰ

遡上モニタリングの結果への助言と評価
河床形状モニタリングの結果への助言と評価

〇適正利用・エコツーリズム検討会議

国立公園利用適正化検討会議からの引継、優先的に検討すべき課題の選定
エコツーリズム戦略の検討、個別課題の検討

〇ヒグマ保護管理方針検討会議

現状の課題と対策の整理、基本的な方針案の検討
対象範囲とゾーニングの検討